

東京家政大学 女性未来研究所 公開研究会

日時：平成 30 年 7 月 5 日（木） 16:00～16:30

場所：女性未来研究所

第 3 回

「ピグミーアカ族とマサイ族の比較文化から学ぶペアレンティング」

人類発祥の地といわれるアフリカ赤道直下に暮らすマサイ族とピグミーアカ族だが、その暮らしぶりや子育て、ジェンダーは対局的であり、両者の文化を対比することで、現代日本の子育て事情の変化と、今後目指すべき方向性について考察を試みた。

マサイ族は、遊牧民であると同時に戦士として戦うことを使命とするアフリカ最強の部族と称されている。昨今ではケニア政府から部族間の争いが禁止されたが、彼らの暮らしぶりと思考には、生き残り戦略として戦士を優遇する男性中心の社会が築かれている。マサイの女は、男に庇護され、戦士を支えるための役割が課せられている。

ピグミーアカ族は、森に暮らし、狩猟採集生活を営む部族である。戦いを避け、身長 120cm 未満の低身長を生かし、敵から「隠れる」「逃げる」を生き残り戦略としている。身体の大きさや力に頼らない彼らの生活は、知恵と技術が重要であり、小動物の狩猟や木の実などの採集に男女の役割はなく、得意とする人が役割を担っている。子育てに関しても同様で男女間の役割はなく、狩猟が得意な女性は出産直後でも狩りに出かける。母親不在時の乳児は、父親が預かり、必要があれば自らの乳首を吸わせて育児をすることが当たり前の行為となっている。ピグミーアカの父親が乳幼児を育児する時間は母親とほぼ同程度であるため、世界一の父親とも称されている。

わが国の子育て事情は、戦後の高度成長期からその後の経済バブル期までは、富を獲得するための戦略として、マサイのような企業戦士と専業主婦の完全役割制が主流であった。現在は、懸命に働いても期待以上の報酬は望めず、働かなくなったら現状維持もかなわないという厳しい現実下であり、現代日本人のリスクヘッジと生き残り戦略は、SDGs よろしく持続可能な働き方、夫婦どちらかが働けない状況になっても、経済の担い手がもう一人いるという状況を作ること、つまり共働きである。生活のための経済、家事、育児、介護を夫婦間で、必要性に応じてシフトできる体制づくりこそ持続可能な家族形態であり、それを実際に体現しているピグミーアカの生活様式から学ぶことは多分にある。

生活全般をシフト制にするためには、個々が高度人材化する必要があり、ジェンダーレスを学び、経済、家事、育児、介護のスキル、語学、コミュニケーション力を身に着ける教育が求められる。それらすべての学びは東京家政大学にあり、本学の学びこそ時代のニーズと化している様に思う。

東京家政大学 ヒューマンライフ支援センター
専門員（准教授）

内野 美恵

